

---

We are **X** !

曇坂陽向

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

We are X!

### 【Nコード】

N5709H

### 【作者名】

曇坂陽向

### 【あらすじ】

リング争奪戦から、早5年が経った。相変わらず並盛町で平和に暮らしていたツナ達。しかし、突然9代目からイタリアへ来いとの手紙が…！？『引継』を前にした、ツナ達守護者の運命は…。

## プロローグ（前書き）

タイトルは、未来編のあるお話のサブタイから引用させていただきました。

初連載ですが、何卒よろしく願います。

## ブローグ

ボンゴレ・イタリア本部

「…しかし…9代目。」

広い会議室に、スーツを着込んだ幾人もの男たちが座っている。

「なに…あと3年あるんだ。…10代目ファミリーはみんな信頼できる若者たちばかりだよ。」

この髭をはやした老人…そう、ボンゴレIX世は、にっこりと微笑んだ。

しかし彼が10代目ファミリーの名を口にした途端会議室内は静まり、ピリピリした空気が流れ出す。

「…確かに…リング争奪戦の事は聞きましたが…」

「その当時のヴァリアーの強さを証明するものもありませんし…第一中学生があの手口やアルコバレーノ…増してやザンザスに戦いで勝つなんて…」

「はっきり言いますが…確かに私も信じがたいです…。」

ボンゴレの幹部だと思われる男たちは鋭く目を光らせる。

「つまり…私や家光の言う事が…信じられないと？」

9代目は溜め息をつく。

「そ…そういう訳ではありませんが…。」

「リング争奪戦当時…雷の守護者はたったの5歳だった事も聞いていますし…。」

「……………。信じられないのが普通…か…。」

「…皆…流石に納得は…」

男は分の悪そうに目を伏せた。

「……………。…なら…実際に彼らに会ってみるかい？」

9代目は少し考えた後、思いついたように言った。

「！…あ…会っ…？」

9代目の唐突な提案に驚く幹部たち。

「…ああ。どうせ何を言っても無駄だろう？…ならいっそ会えばいい。その方が手っ取り早いし…みんなにも分かってもらえるはずさ…。」

9代目は、またにっこり笑った。



## 標的1「守護者集合」(前書き)

本編入ります。

お楽しみ下さい！

## 標的1「守護者集合」

日本・並盛町

並盛町の真ん中あたりに位置する、赤い屋根の一軒家。  
その一室に、華奢な青年とスーツを着た小さな赤ん坊がいた。

「……………」

部屋は静まっている。

…ただ、青年が手紙らしきものを握りしめ、赤ん坊を睨んでいた。

「おい…何とか言えよ…。」

「それは俺の決めた事じゃねえ。とにかく従う事だ。」

ボンゴレの殺し屋にして、アルコバレーノ、リボーン。  
彼は帽子をクイッと上げた。

「意味わかんねえ…。」

「…わかんねえ事ねえだろ。そのまんまじゃねえか。」

青年…もとい沢田綱吉はたじろぎにたじろいでいる。



「そのまんまっつて！分かんないよ！いきなりイタリアに來いとか引き継ぎとか9代目の命令だとか！」

ツナはすごい剣幕で勢いよく立ち上がった。

「…とにかく、守護者を集める。話はそれからだ。」

リボーンは溜め息をつきながら、ツナにケータイを差し出した。

「……………」

ツナは無言でリボーンを睨みながらも、渋々ダイヤルを押し始めた。

「並盛公園に全員呼ぶんだぞ。」

「……………うん……………」

「もうそろそろみんな来るかな…。」

ツナはさっきからずっと溜め息をついている。

「まあ説明は全て俺に任せろ。」

「……。」

それから3分ほど。

「10代目！」

「ツナ！」

入り口から入ってきたのは獄寺と山本だった。

「あ…2人とも…」

「ちゃおっス、獄寺、山本。」

「どうも。こんにちはッス！」

「よっ。」

2人が公園に入ってきたるなり、何故か後から若い女の子が数人公園に入ってきた。

ちらちらこちらを見ている。

「…また余計なもん引き連れて来やがって…」

リボンがボソツと呟いた。

「はは…」

ツナは苦笑いする。

「?…なんすか？」

「どうした？」

2人はもちろん気付いていない。

「い、いや、それより2人で来るなんて珍しいね。」

「あはは。偶々一緒になっちまってさ。」

「ケツ…いい迷惑だぜ。」

獄寺は山本に対していつものように悪態をついている。

「それよかさ、電話で言ってた用件って何なんだ？」

「あ、ああ…。実は守護者を召集したのは俺じゃなくてリボーンなんだ。」

ツナはリボーンに目をやった。

「…まあ待つてろ。守護者が全員集まったら色々説明してやる。」

「はあ。」

「…そっか。」

それからまた少し経った。

「…あ、…」

「あ、ボンゴレ！」

「おう、沢田。」

ランボと了平だ。

「やあランボ。こんにちは、お兄さん。」

「ボンゴレ！どうしたんですか。守護者の召集って…」

ランボはランドセルを背負っている。どうやら小学校からそのまま来たらしい。

「ちゃおっす、ランボ、了平。」

リボーンがいきなりランボと了平の目の前に現れた。リボーンは珍しくランボを名前で呼んでいる。

「おう、元気か。」

了平はニコツと笑った。

「今日召集したのは実は俺なんだが…とにかく守護者が全員集まれば話をする。」

「?…そうか。」

了平もランボも不思議そうにしている。

>ドゴオオオオオオン!!!!!!!!!!<

「……………!?!……………」

すると突然、地響きのような破壊音が聞こえた。皆、目を丸くしている。

公園内は騒然としていた。

「な…」

「な、何ですかこの破壊音…」

「公園の外か!?!」

「い…行こう!」

ツナ達は全員公園の外に出た。

激しく鳴り響く金属音。

「…君…よくも並盛の建物を破壊してくれたね…。」

「攻撃してきたからただ避けたんです。自分の非を他人に押し付けるものではありませんよ。」

2人の20歳くらいの青年が恐ろしいほどの殺気を漂わせ、睨み合っている。

そして何より目立つのは、青年達が手にしている武器らしきもの。

…どうしてもおもちゃには…見えない。

彼らはそれを構え直した。

「「……………」」

張り詰めた空気。

そして2人はお互いに相手に向かって走り出そうと…

「待て！」

「「！」「」

しかし、その張り詰めた空気は破られた。  
2人の動きも止まる。

「げ…雲雀！…と骸！？」

雲雀、骸と呼ばれた2人の青年。

彼らの目線の先には、ツナ、リボン、獄寺、山本、了平、ランボ  
がいた。

「…邪魔しないでくれる？今この南国果実を咬み殺してるとこだから。」

「クハッ…アヒルごときにそんな事出来るわけないじゃないですか…。」

（言ってる事ただの子ども喧嘩だー！！）

ツナは心の中でツッコミを入れながらも、さすがにこの状況はヤバ  
いと思っただけらしい。

「とにかくやめて下さい！危険ですから！」

ツナはこの2人とは長い付き合いだったので、こんな状況には慣れ  
ていた。

「いくら君の要求とはいえ…さすがにそれは出来ないよ。」

「…黙って見ていてくれますか、沢田綱吉。」

「で、でも…とにかく今はやめて下さい！大事な話があるんです。お願いですから。ね？」

ツナはやっぱり2人に笑いかける。

「……。」

「ちゃおっス、雲雀、骸。」

「！」

そこに突然現れたのはリボンだった。

「お前ら、今はやめとけ。そしたらツナがいつでも相手してくれるらしいぞ。それにお前らのバトルもまた今度広いところでやりやあい。」

「は、はあ！？」

ツナの顔色が瞬時に変わった。

「ふーん。」

「ほう。」

2人に笑みが浮かぶ。

「この前は勝負がつかなかったから…いいかもね。」

「クフフフ…勝てば…君の体も乗っ取る事ができますかね。」

「ひ…」

ツナの顔が引きつる。

「つーことで公園に戻るぞ。」

リボーンは淡々と話を進めた。

「は…はあ…」

他の守護者たちはたじろいでいる。

「ちょ、リボーン！こうなるといつも俺頼みじゃん！

この前雲雀さんの相手したばっかだし！あの時体中傷だらけになつて膿できてずっと痛かったんだぞ！？」

ツナは小声ながらも激しく言った。

「人は戦って強くなるもんだ。」

「こんな時だけ正論めいた事言うなよ！」

ツナの反発も虚しく、リボーンは適当にあしらった。

「ボンゴレ！俺は雲雀さんにも憧れてますけど、ボンゴレの方がもっと尊敬してます！だから勝って下さいね。」

ランボが雲雀に憧れているのは、イーピンの影響なのだが、それ以上ランボはツナを尊敬していた。

「ラ…ランボ…」

ツナは否定も出来ず、半泣きになっている。

「ツ…ツナ、ファイト！」

「あ」

「えっと……お気の毒…っス…。」

「いやちよっと」



「極限勝て！沢田！」

「……」

それぞれ言葉をかけてくるのはいいが、なんの慰めにもなっていない。

「何で俺がこんな目に……」

（しかもまたあの2人と……）

「っていつか、何で今日は骸な訳？クロームはどうしたの？」

（クロームだったらこんな風にならずに済んだのに……）

「すみませんね僕で。いいじゃないですか、暇なんですよ。」

「そ……そう……」

（なんかすねてるー！！）

……そうしてなんやかんやしている内に、ツナ達は公園に戻って来たのだった。

t o b e c o n t i n u e . . .



## 標的1「守護者集合」（後書き）

次から手紙の内容についての説明に入ります。

## 標的2「9代目の命令」(前書き)

9代目の手紙の詳しい内容と、その意味とは…？

## 標的2「9代目の命令」

### 並盛公園

「…さあ、やっと落ち着いたな。」  
リボーンはやれやれ、と溜め息をつく。

（落ちつかないよ…）

雲雀と骸が未だに険悪な雰囲気蔓延させているのだ。

「とにかく大事な話だ。全員心して聞けよ。」  
リボーンはブランコの囲いの柵にちょこんと座った。

「まあ守護者を全員集合させるくらいだ。事の大きさは察している  
だろうが…。」

リボーンはここで一息置いた。

「……………」

守護者達は息を呑む。

「…実は今日の朝、イタリアにいるボンゴレ9代目から手紙が届き、ある命令が入った。」

「……！」  
リボーンがボンゴレ9代目、と言った途端にその場の空気が一変する。

「…もう単刀直入に言うが…3日後、ボンゴレのイタリア本部に守護者全員で来い…との事だ。」

「…な…」  
守護者たちは目を見開いている。

「…な…何でだ？」  
山本が驚きながらも尋ねた。

「ああ。…つい先日、ボンゴレの本部で幹部会議が行われてな。  
…実は…9代目は高齢のため、9代目自らが10代目ファミリーとの引き継ぎを3年後に決めたらしいんだ。」

リボーンは帽子の鰐を下げた。

「え…10代目ファミリーって…」

「俺達…ではないか…」

みんな啞然としている。

「その通りだ。」

「……。」

ツナはため息を静かに吐いた。

「…しかし…その引き継ぎの件と命令の繋がりがわかりませんね…。」

「わりと驚いていない様子の骸が、無表情に尋ねる。」

「…つまり、10代目ファミリーとの引き継ぎを決めたのは9代目」

の独断だ。

その意思を9代目は幹部達に会議で話した。

…その時の幹部達の反発が…それは厳しいものだったらしい。」  
リボーンもまたいつもより大きめに溜め息をついた。

「それって要するに…俺たち10代目ファミリーが9代目ファミリーに受け入れられなかったってことっスか？」

獄寺は神妙な顔付きで聞いた。

「何でだ？俺たちはリング争奪戦でちゃんと勝って認められたんじやねえのか？」

山本は不思議そうに聞く。

「事実だと分かっているても疑念は抱くだろう。」

ただの中学生の集団がヴァリアーに正当に勝つはずがない…ってな。それに9代目の幹部達はお前らのことをよく知らねえ。」

「…俺はまだマフィアなんて…」

ツナがボソツと呟く。

「まて小僧！俺達は確かに最高の人選ではないか。それを知らないという理由だけで片付けられては理に合つとらん！」

しかしツナの呟きは、了平の大声によってかき消される。

「そう怒んな。幹部達が反発すんのも…まあ仕様ねえっちゃ仕様ねえんだ。」

「…？」



「幹部達は、お前らが10代目に就任した時の事までちゃんと考えてる。つまり、お前らが下の構成員たちに尊敬されるような強さと人柄を持っているか、

またそれまでの経歴や人種まで考えてんだ。

9代目幹部達はお前らの実際の強さや人柄、外見はよく知らねえが、経歴や人種までかなり詳しく調べてるからな。」

リボーンは守護者達をジッと見る。

「…それで9代目の幹部達は、俺達には10代目になる資格がないって判断した…そういう事ツスか？」

獄寺は厳しい顔をしている。

「一概に決め付けた訳じゃねえが…まあそういう事だな。マフィアのボスや幹部にするにあたって、お前らには色々問題があるんだ。」

「……問題？」

守護者達は怪訝な顔をしてリボーンを見つめている。

「…ああ。まず1つ、守護者の構成だ。お前らの中で、純粋なイタリア人は骸とランボの2人だけだ。

初代の子孫のツナとクウォーターの獄寺を抜いてもクロームを入れて4人は純粋な日本人ということになる。

だから人選が偏ってるって意見があるんだ。」

リボーンは無表情ながらも少しトーンの低い声で言った。

「でもボンゴレは日本贖人なんだろう？それにみんなイタリア語喋れるし…」

最初からイタリア語が話せるランボと骸と獄寺以外の守護者達は、各々の家庭教師にイタリア語を教えてもらったり、独学で勉強したりして簡単なイタリア語は話せるまでになっていた。

「いくらボンゴレが日本贖人だったって、守護者の半数が日本人なんて異例中の異例だからな。

それに守護者がイタリア語を話せるのは当たり前のことだ。」

「…。」

守護者達は少し眉をしかめた。

「さてもう1つの問題だが…簡単に言うと、年齢だ。

…お前らは了平、雲雀、骸以外はまだ未成年だ。

それは3年経ってもまだ若い。

ランボに至っては3年経ったってまだたったの13だ。

流石に中学に入ったばかりのガキにはついていけない…そう言う奴もいる。」

「……。」

ランボはムスツとしている。

「…跳ね馬は…14、5でキャツパローネのボスになったと言っていたよ。」

「…！」

そこにずっと黙っていた雲雀が発言した。

自ら発言なんてめったにしない雲雀に、他の守護者達は驚いている。

「確かに、雲雀の言うとおりだ。俺もディーノさんから聞いた事あるし、ランボの分は俺達で補える。」

山本は真っ直ぐリボーンを見た。

「ああ……それはそうだが、あの時のディーノとお前らの状況は全く違うんだ。」

リボーンは相変わらず目線が下に傾いている。

「……？」

「ディーノはな、ボスである父親が亡くなった為に、ディーノ1人がボスになっただけで、

他の人事異動は全くなかったんだ。

しかしお前らはボスだけじゃなく、幹部までごっそり入れ替えをする。それにはお前等は少し若い。」

リボーンの声が、いつもより低いように聞こえた。

「それにキャツバローネは今でこそ巨大ファミリーだが、ディーノがボスになったばかりの頃のキャツバローネはまだ中小ファミリーの1つでしかなかったからな。

その当時のキャツバローネと今のボンゴレではデカさが違う。」

守護者達は言い返す事もできなくなった。

「それに加え強さも分らないとなると……反発はさらに激しくなる。……そういう事だ。」

「……つまり、イタリアに呼ばれたのは俺達の強さや人柄を9代目の

幹部達が知る為っていう事ですか。」  
獄寺が鋭い目で言った。

「ああ。…さすが、察しが良いな。」  
リボーンはニツと笑った。

「い、いえ…」  
獄寺は恥ずかしそうに頬をかいた。

「でも…俺達の強さを知る為って…まさか戦わされんの…!？」  
ツナは恐る恐る聞いた。

「…さあ、どうだろうな。」

「どうだろうなって！ランボは無理だぞ！？まだリングに炎も灯せないんだ！  
これといった技も無いし、第一学校はどうするんだよ！」  
ツナはいつになくピリピリしている。

「ボンゴレ…」  
ランボは悔しそうな顔をした。

「命令は命令だ。それに学校なんて休みやがれ。」

「休む理由はどうすんだよ。」

「インフルエンザ」

「めっちゃめっちゃ季節はずれだろ！！現在進行形でポツカポカじゃないか!!！」

山本は手で口を覆って笑いをこらえている。

「ま、そうピリピリすんな。何を言おうがお前らは9代目の命令に従え。…それだけだ。」

リボーンは鼻をフン、とならした。

「……ちよつと待つてよ。」

声を上げたのは…もちろん、雲雀だった。

（まあ…こいつが素直に従う訳ねえな）

「…何だ雲雀」

「何故僕がそんな所に行かなきゃならない訳？」

雲雀は目をギラギラ光らせている。

「それは…お前がボンゴレ10代目の守護者だからだ。」

「…そんなの関係ないよ。僕は並盛の秩序だ。ここを離れる訳にはいかない。」

雲雀は鋭い目でリボーンを見ている。

「…並盛は他の奴らに任せればいい。それにお前が存在するだけで並盛の風紀は乱されねえ。」

リボーンも雲雀と負けないくらい鋭い眼差しで雲雀を見返す。

確かに雲雀の不在中に並盛になにかあれば、雲雀が帰ってきた時に咬み殺されるのは必至だ。

「…それでも僕がイタリアに行く理由はない。」

雲雀は眉をしかめた。

不覚にも他の守護者達の背筋に悪寒がはしる。

雲雀はかなり機嫌が悪いらしい。

「…さっき言ったはずだぞ。お前はボンゴレ10代目雲の守護者だ。」

「……………」

雲雀から殺気のようなものが感じられた。

しかし、リボーンはその殺気をものともしない。

「…まったく……………それなら聞くが…お前は何故そのリング争奪戦以来今までずっと肌身離さずそのリングを持ってんだ？」

リボーンは雲雀の右手中指につけてある雲の刻印の入ったリングに目をやった。

「……………」

雲雀も自分のリングに目をやる。

「そのリングはボンゴレの雲の守護者の証だ。お前はそのリングの意味知った上で、ずっとそのリングに炎を灯して戦ってきたんだろ？」

リボーンはそれから少し口元を緩めた。

「それに、イタリアに行けばこいつらの中の誰かと戦えるかもしれねえぞ。」

リボーンはずっと黙って聞いていた守護者達を指差した。

「……は？」「……」

骸以外の守護者たちから冷や汗が出る。

「さっき言っただろ。9代目が幹部達にお前らの強さを見せたいんなら戦いをさせるのが一番だ。」

つまり守護者同士で戦わされる可能性が一番高い。」

「はあ！？さっき『さあな』って言ったの誰だよ！」「ツナは威勢良く反論する。」

「良いじゃないですか、ボンゴレ。君や雲雀恭弥と戦えるなんて……」一方骸はノリノリである。

「ふうん……なら言ってみても良いかもね。」  
案の定、雲雀はニヤリと笑って答えた。  
(なんか超行く気になってるー！！)

「あ……」

ツナは、服の裾を引っ張られるのを感じた。

「ラ……ランボ……」

ツナが振り返ると、ランボが自分にしがみついて半泣きになりながら震えていた。

「俺がいたら……絶対認められません……！」

10代目ファミリーはダメだって言われます……。

俺だけのせいで…他の守護者はみんなすっごく強いのに…。

俺戦えないよ！どうしようツナあゝ！」

（口調が最後の方だけ昔に戻ったな…。）

「ランボ…お前がまだ10歳って事は9代目ファミリーの人達もみんな知ってるから、ランボはランボに出来る事をすればいいんだ。何か無理な事要求されたら俺がちゃんと言ってやるから。」

それにいつもイーピンと修行頑張ってるから大丈夫だって。」

ツナは優しく言った。

「俺に…出来る事…ですか…」

ランボはボソツと呟いた。

「そうそう。」

ツナはランボの頭を撫でた。

それを見ていたリボーンはフン、と小さく笑った。

「とにかく、イタリア行きは明後日だ。この公園に10時だぞ。後、服装はスーツな。」

リボーンは柵からピヨンと飛び降りながら言った。

「え…俺スーツなんて持ってねえけど…」

「買え」

「ええ!?!」

「マ…マジすか…」

「マジかよ…」

「今極限に金が無い!」

「僕はクロームの分とで二着も買わないといけないんですが…」

「……。」



「俺のサイズのスーツなんて無いんじゃない？」  
みんなスーツは持っていないらしい。

「ま、そういう事だ。じゃあまた明後日な。」  
そう言うとりボーンは俊敏な動きで公園を出て行った。

「……………」

守護者達は啞然としている。

「な…なんていうか…」  
みんなごめん…いきなり呼び出して…と、とにかく…帰ったらイタリア行きの準備しといて。じゃあ、今日はもう解散って事で。」  
ツナはいきなりのこと頭を整理しきれなかったが、なんとか声をだした。

「オツケ。イタリア語の練習もやってくわ。じゃあな、みんな。」

「わかりました。じゃあまた明後日会いましょう。」

「極限了解した！じゃあな！」

「…じゃあね。」

「了解しました。クロームにも全て伝えておきますよ。」

戸惑いを見せながらも、守護者達は各々言い残して次々と公園から出て行った。

「…何か公園の中、女の人が多いな…。」

ツナは公園を見回した。  
異様に女性の数が多く、ほとんどの女性が黄色い声でひそひそ話している。

（守護者って…あれ強さとか以前に顔で決めたんじゃないか！？）

「あの…ボンゴレ…」

ツナはまたシャツが引つ張られているのを感じた。

「あ！ランボ…。お前は帰らないの？」

ツナはハツとして、答えた。

「ボンゴレ！あの…俺、明後日までにリングに炎灯して、新しい技完成させます！」

「…ランボ…？」

ツナはいつもの泣き虫少年が一瞬頼もしく見えて、幻覚でも見ているんじゃないかと思った。

「3年後…俺も守護者として、少しでも戦力になれるようになりたいんです。

…それで…もっと修行して尊敬するボンゴレとか雲雀さんみたいになります！」

でもそれはやっぱりランボだった。

「俺と…雲雀さん？」

ツナは優しく微笑みながら尋ねた。

「はい。イーピンが雲雀さんはボンゴレと同じ位強くて格好いいんだよっていつも言ってくるんです。」

ランボは少し頬を染めて、頭をかいている。

「あ…ははは…。同じ位強いかはわからないけど、俺なんかより雲雀さんの方が断然格好いいよ。」

ツナは恥ずかしそうに言った。

「そんなことないですよ！俺すぐボンゴレ格好いいって前から思ってたんです！だから俺、ボンゴレみたいになりたいって思ったんですよ。」

「あ、ありがとうランボ。そんなこと言ってくれるのお前だけだよ。」

ツナはランボの小さい頭に手を置いた。

「…ねえボンゴレ。一緒にスーツ買いに行きましょう。奈々さんに言ったら俺のも買ってもらえるかな…。」

ランボは目を上に泳がせている。

「大丈夫だよ。母さんにはちゃんと行ってやるから。…今から買いに行こうか。」

ツナはふう、と溜め息をついてから、歩き出した。

それにランボも続く。

（あのウザかったランボがよくここまで成長したな…。最近急に成長した気がする…。…まあまだ泣き虫は変わってないけど。）

ツナは本当の兄のような目でランボを見ていた。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
.  
.  
.

### 標的3「それぞれの想い（上）」（前書き）

終わりが中途半端ではありますが、一応（上）なので、お許し下さい；；

### 標的3「それぞれの想い（上）」

「ふー…」

獄寺は目の前にあるスーツケースを前に、大きく溜め息をついた。

（やっと準備終わったぜ…。三泊つっても結構な量だな。）

「3年後…か。」

そう、3年後守護者達はマフィアの幹部としての生活を送って行く事になる。

それを確実にする為に明後日、自分達はイタリアへ発つ。

「イタリアか…随分懐かしいな…」

といっても、獄寺にとっての第一の故郷…それはやはり並盛だった。

この地で、獄寺の親友であり、最も尊敬するツナと、他の守護者達と出会ったのだ。

そして他にも色んな出会いがあつて、考えてみれば、思い出が溢れるように浮かぶ。

「…俺は…ただ時間に身を任せるだけだ」

（この時間を生きられるならそれでいい）

それが獄寺の答えだった。

\*  
\*  
\*

「はーあー…」

山本は自室のベッドに仰向けに寝転がっていた。

（準備って結構大変だな…）

机や床の上には服やら生活用品やらが散乱している。  
どうやらまだ準備は終わっていないらしい。

「…イタリア…」

（って…地中海のそこだったよな…）

何とかイタリア語は話せるようになったが、やはりまだ不安はあった。

「マフィアって…何か今まで実感沸かなかったんだけどな…」  
山本がマフィアをちゃんと知ったのは、高校生位の頃だったか。

（マフィアになったら並盛にもあんま帰って来れねえよな…。）

「っていつか…」

ふと、気が付く。…山本は色々な意味でゾクツとした。

（…野球…やっぱり出来なくなんのかな）



（守護者は確か…ボンゴレの最高幹部なんだよな…。…ここのだちにもずっと会えなくなるのかな）

色々な感情が込み上げてくる。

「…あ、そっか」

マフィアになるって…そういう事なんだ。

（俺ってやっぱりバカなんだな…。覚悟も意識も…何もないわ…。今気づいた）

山本は仰向けになっていた体を横に倒して、机や床に散らばった服やらなんやらを眺めた。

（俺…今さっきまで『俺は将来野球選手か、無理だったら寿司屋継ぐんだ』って…思ってたな……。間違いなく）

「俺は獄寺とは違うな」

山本は声に出して少し後悔した。

「ちょっと散歩でもするかな。」  
山本は小さくため息をついて、すくつと起き上がった。

\*\*\*

《お前はそのリングの意味知った上で、ずっとそのリングに炎を灯して戦ってきたんだろ?》

《お前はボンゴレ10代目雲の守護者だ。》

「……………」

そうだった……、分かっていた。  
心のどこかで、認識していた。

「はぁ……」

雲雀は珍しくため息をついた。

電気も付けないで、薄暗い自室の床に座っている。

「……………」

雲雀は、ふと、少し前にリボーンから聞いた事を思い出した。

・ 守護者にはファミリーに絶対に入らなければならないという縛りはない -

《別に収集かった時以外は自由にしてりゃいい》

(…：僕がボンゴレに入る訳がないと思っているのか…)

雲雀は少し笑った。

「心外…だね」

群れるのを異常な程に嫌う雲雀が一般企業に就職なんて100%有り得ないし、雲雀の一番の取り柄といえばやはり戦闘だった。

（ボンゴレに就職…。…素晴らしく面白そうじゃないか）

ボンゴレには、自分が認める数少ない人間がみんないる。そして、いつでも戦える。

それに…

「あの男の部下になるのも悪くない。」

雲雀は更に口元を緩め、不敵な笑みを浮かべた。

\*\*\*

「あー…。一気にやったから疲れたな…。」

ツナは並盛町の真ん中を流れる河川の土手を歩いていた。  
ランボとスーツを買いに行った後、家に戻って準備をしていたらしい。

どうやら準備は終わって、今は気まぐれに散歩しているようだ。

「……………」

（俺が…イタリア有数の巨大マフィアのボス…）  
ツナはため息をつく。

（…………ずっと俺は…マフィアのボスになんてならないって思ってた）

ツナは歩きながら横目に川を眺める。

（でも俺は…『マフィアのボスになる』ってことを、イタリアに行  
って証明するんだよな）

ツナは無数の矛盾を感じていた。

「不思議だな」

（俺は…何で…）

「沢田さぁーん!!」

「!？」

いきなり高い声がツナを呼んだ。

「沢田さん！イーピンだよ！こっち！」

ツナはバツと後ろを振り向いた。

「あ…イーピン！…とランボも！」

イーピンが土手の草村から手を振っている。その後ろにランボがいた。

「何やってるの？」

ツナはイーピンとランボの元に走っていった。

「修行やってる！」

ランボね、リングから炎出ない。」

イーピンは昔よりはうまくなった日本語で必死にしゃべっている。

「…仕方ないさ。ランボはまだ十歳だもんな。まだ覚悟なんて分か

らない歳だよ。

俺だって15の時に苦労した末にやっと炎出たんだから。」  
ツナはランボに目を向けた。

「で…でもボンゴレ！リングから炎も出せない守護者なんて…」

「焦らなくて良いんだよ。お前今新技開発中なんだろう？  
まずそっちから頑張った方が良いんじゃないか？」

「…でもランボさんトイレ行きたくなっちゃったんだもん…」  
…また口調が昔のように戻った。  
ランボは口をとんがらせている。

「ウソ！ホントはしんどいだけでしょ！」

「ウソじゃないもん！」

「ま、まあまあ！いいじゃん！さっきまで修行頑張ってたんだろ？  
ちよつと休憩にしよう。ランボもついでに家に戻ってトイレ行って  
来いよ。」

ツナは掴み合いのケンカになる前に割って入った。

（今日ケンカの仲裁ばかりだよ…）

いつも思うが、周りの協調性の無さには呆れる。

「…じゃあ、行ってきます！」

ランボはたたたつ、と逃げるように走り去っていった。

「すぐ戻って来いよー！」

「はあい！」

「…もう、ホント仕様がないなあ…」

イーピンは大きくため息をついた。

（イーピンも大変だな）

「イーピン、いつもランボの修行に付き合ってたの？」

「うん！ランボ、1人じゃ何もできないもん。」

「ははは！偉いな、イーピンは。」

「えへへ…」

イーピンはニコツと笑った。

「…立ち話もなんだし、階段に座ろうか。」

ツナはコンクリートの階段を指差した。

「うん。」

2人はランボの帰りを待つべく、ゆっくりと階段に座った。



t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
.  
.  
.

#### 標的4「それぞれの想い（中）」（前書き）

遅くなつてすみません！

実は今回（下）ではなく（中）です。

「それぞれの想い」はあと少し続きます。

#### 標的4「それぞれの想い（中）」

2人は並盛町の端にある土手にいた。  
もう、陽は落ちかけている。

「なあイーピン。」

「何ですか？ 沢田さん」

「何でランボ、最近になって俺の事『ボンゴレ』だなんて呼び始めたのか知ってる？」

「ずっと不思議に思っていた。」

かなり急にそう呼ばれるようになり、正直ツナの方が戸惑った。

「ああ…。ランボね、いつもわがままでしょ？ だから私言っただけです。」

『そんなわがまましてるからランボは目にもかけられないの！ 沢田さんは特別優しいだけなんだから！ 今守護者は7人じゃなくて6人だよ！』…って。」

イーピンはフン、と鼻をならす。

（す…凄まじい…）

「…よく言っただね…そんな事…」

ツナは苦笑いしている。

「それくらい言わなきゃ分からないよ、ランボは。」

「…それからあんな口調になっちゃったの？」

「うん、ホント分かりやすい。」

イーピンはまったく…と小さく呟いた。

（イーピンは元々しつかり者だったけど…最近は更にたくましくなっちゃったな…。）

イーピンはこの歳で何でも1人でできたし、ランボの面倒を見る余裕さえあるほどだった。

「イーピン、これからもランボとずっと一緒にいてあげてね。」

「？そんなの当たり前だよ。」

「ははは、それもそうだな。…まあこれからもランボと仲良くしてあげてね。」

「…？…はい。」

イーピンは首を傾げながら笑った。

\*\*\*

「あーあ…」

山本は並盛町を適当にぐるぐる歩き回っていた。

（早く準備しねえと駄目なのになー…）

「どこに行こつかな…」

山本は気が付くと並盛町の端にある土手を歩いていた。

昔、ツナと獄寺とよくこの辺りを歩いたのを覚えている。

学校帰りに通ると大きな夕日が出ていて、ツナや獄寺の髪を染めていた。

ツナの茶色っぽい髪は更に赤みを増して、薄く鈍い光を放っていた。

獄寺の銀色の髪は光に反射して、オレンジ色の光がキラキラと輝いていた。

「俺は…」

（真っ黒だったな、多分。）

自分で自分の髪が見えた訳ではない。

ただ、自分の髪は真っ黒で、色は変わらないだろう。

…そう思ったのだ。

（…俺自身もそうなのかも。）

自分は生まれてこの方、ずっと野球選手になりたいと願ってきた。

マフィアになるなんて、思っわけもないのだ。

（俺は生まれた時から真っ黒に染まっでいて、違う色には光れないのかもしれない。）

（というか）

光りたくない…？

「…」

キラ、と一瞬煌めいた光。

…あの頃と全く変わらない、薄く鈍い光。

「ツナ！」

髪が揺れ、その後映ったのはいつもの優しい笑みだった。



\*\*\*

「そつかあ、ツナ準備終わったのな。」

「うん。それにしても珍しいね、山本そついうのいつも早いのに。」

ツナと山本は土手をゆっくりと歩いていた。

「……まあなんか気分が乗らないっつーかな……。ま、また帰ったらやるわ。」

「…そう…」

「ツナはそれから何してたんだ？」

「ランボの修行に付き合ってた」

「へえ」

それから、無言だった。

「なあ」

山本が不意に、ツナに話しかける。

「?…何?」

「ツナはさ、ボンゴレのボスになってイタリアに行く事、どう思う?」

「!」

ツナは少し目を見開いてから、目線を落とした。

「……俺は…未だに分らないよ。」

「え」

意外なツナの答えに、山本は驚いた。

「俺はずっとマフィアのボスになんてならんって思ってた。  
でも、今実際にマフィアのボスになる準備を着々と進めてる。  
…矛盾、してるだろ？」

「俺バカだし、もう何がなんだかよく分からなくってさ。」

「……。」

（ツナも…迷ってんのか）

「…でも俺は……、最近気付いたんだ…。  
…覚悟しなきゃなんない  
って…。」

「覚悟…。」

聞き返したのではない。…ただ、呟いた。

「うん、最近っていうのが情けない話なんだけどね…。」  
ツナは小さく笑う。

「…そっか…、覚悟…な…。」

「…。」

「俺なんか…さっき気づいたんだぜ。」

「？」

「将来のこと、選ばなきゃならないって」

「……！」

ツナは少し悲しそうな表情になった。

「…あ！違う違う！別にツナのせいじゃないし！それに俺…マフィアになりたいって…っていうかみんなでボンゴレを護りたいって思ってたから！」

山本もまた、ツナの気持ちを知っていた。

「でも山本は…やっぱり野球選手になりたいんだろ？」

「ああ……夢が2つあるなんて…欲張り過ぎるよな…」

「…そんなことないよ。夢があるのは良いことだもん。…俺なんか夢もなかったから。」

「そうかな…。…ま、ここでうじうじしても何も始まらないよな

「！」

山本はいつものようにニコツと笑う。

「そ、そうだよ！」

ツナも山本が笑ったのにつられて笑う。

「俺さ…俺１人だけが悩んでるんだって勘違いしてた…。でも、ツナも悩んでるんだって分かって、ちょっとラクになったわ。」

「イタリアに行って…本当の答えを見つけようと思う。」

ボンゴレの本部に行くことで…自分の力でどちらか選択する。」

山本は、美しいオレンジ色の空を見上げた。

「……。」

ツナがホツとしたように笑う。

「ツナの髪の毛ってさ、夕陽に当たると光ってて綺麗だな。」

「そう？…山本の髪も茶色く光ってて綺麗だよ。」

「！」

それから２人は夕陽が沈むまで土手を歩いていた。

t o b e c o n t i n u e . . .



#### 標的4「それぞれの想い（中）」（後書き）

次回で「それぞれの想い」は終わりです。

そしてようやく守護者たちはイタリアへ旅立ち、ボンゴレのイタリア本部へと向かうことになります。

そこで、アンケートを取りたいと思います！

ボンゴレ本部に行くにあたって、出して欲しいキャラや、絡ませて欲しいキャラなどを募集します\*+

是非ご参加下さい！m（　　）m

心よりお待ちしております。

## 標的5「それぞれの想い（下）」（前書き）

お待たせしました。

すごく遅れてしまつて、申し訳ありません！

まず注意して頂きたいのですが、この小説の設定として、

登場するキャラは未来編を経験していない方のキャラ達です。

例えば、この小説のツナは10年後に行つたツナではなくて、昔の自分達を10年後に行かせる原因になつたツナです。

分かりにくくてすみません……

そして注意2個目。

私はあまり意識せずに書いたのですが、少しだけツナ×京子、獄寺×ハルの要素が入っていると思われる方がいるかもしれません。

あつてもほんの少しですが、一応ご注意下さい。

長々とすみませんでした。

では本編へどうぞ！



## 標的5「それぞれの想い（下）」

並盛の近くにある町、黒曜。

その黒曜に、黒曜ランドという廃墟がある。

そこは鬱蒼としており、かなり不気味だ。

しかし、その黒曜ランドには5、6年ほど前から人が住んでいる。

「クローム、」

千種はいつものようにトーンの低い声でクロームどくろの名を呼んだ。

「何、千種」

彼女は手を止めて、千種の方に振り向く。

「犬が昼ご飯買って来てくれた。…食べよう。」

「…うん。」

クロームは少し笑って、いつも食事をする部屋に向かった。

\*\*\*

(これ…おいしい…)

3人は何か会話をする訳でもなく、ぱくぱくと食事を続けていた。

「はあ、ほふほ…」

すると、突然発せられた間抜けな声。

「犬、行儀悪いよ。」

口の中に食べ物を入れたまま喋り始めた犬に、いつものように千種が注意する。

「うつへーメガへ！はべてる途中ひひゃへりたくなっはんあよ！」  
そしてまたいつものように犬の反撃。

「犬…何言ってるのかわからない…」  
クロームがポツリと呟くように言った。  
…これも、いつものこと。

…でも、いつものことなのに…いつもの日常なのに。

…何故か今日は空気が重い気がした。

「うつへーバカ女！」

やっと食べ物を飲み込んだらしい犬が、はつきりとクロームに怒鳴りつけた。

「ごめん…」

「謝んな！」

「ごめん…」

放っておくとこの会話が永遠に続きそうだ。

（ホント…仕方ないな…）

千種は小さくため息をつく。

「…で、犬は何を言おうとしてた訳？」

「は？」

犬はポカンと口を開けて、千種の方を見た。

「なんか言おうとしてたから」

「……」

すると犬は急に静かになり、少しだけ俯いた。

「……。」

千種もクロームも、犬が話し出すのを待つ。

「別にイタリアに行って何すんだって聞こうとしたただけだびよん。」

犬は少し目をそらした。

「……それは…私にもわからない。…9代目の…命令だから」  
クロームも少しだけ俯く。

「つかイタリアに行ったらあのウサギの守護者にならなきゃいけないじゃねーの？骸さんは一体何考えてんらびよん！」  
犬にまたいつもの威勢の良さが戻ってきたようだ。

「……ボスは…本当にすごい人だから…」

「…？…何か言った？クローム」

「い…いや…何も…」

「…そう」

そして3人はまた黙々と食事の手を進めていった。

\*\*\*

「お兄ちゃん、」

「なんだ京子」

黒曜と同じく、笹川家でも丁度夕食をとっているところだった。

しかし現在家に両親はいない。

父親は仕事、母親は同窓会だなんだ言って帰ってこないのだ。

「イタリアに行くのは良いけど…無理しちゃ駄目だからね。」  
京子の声色はいつもより暗い感じがした。

「心配はいらん。」

了平は落ち着いた笑みを浮かべる。

「ツナ君は…」

不意に浮かんだ、あの優しい笑顔。

「ん？」

「いついや、…何でもない…」

「…沢田なら、大丈夫だ。」

「！」

さすが兄だ、と改めて思った。

「あいつの『強さ』はお前も知っているだろう？」  
了平はズズツと味噌汁を啜る。

「うん！」

その笑顔は優しいが決して弱々しいものではなく、とても安心できるような、頼もしい笑顔。

（ツナ君…。）

ただ、胸がざわついたのは、彼がいつか遠くへ行ってしまふのではないかという不安が心の奥底にあったから。

\*  
\*  
\*

クローム、

“…！”

ハツとし、気が付けば現実の世界ではなくなっていた。

クローム…



彼女を呼ぶ優しい声の主は、それもいわば本当の声ではない。

“骸様…”

辺りをぐるぐると見回して、少しずつ歩を進める。

しかしどこにも彼の姿はなく、ただ声が響くだけ。

ようこそ、クローム

ようこそ、とは聞こえても、彼自身の姿は見えない。

“はい…。今日は…どうしたんですか…？”

クロームは骸の姿を探すのを諦め、返事をした。

いえ…。なんとなく、話をしたかったんですよ。

“？”

骸は、用もなくこんな所に自分を呼び出すような男ではない。

しかし骸が話をしたいと言っている以上、とにかく何か話をしなければならいだろう。

（何か…話題…）

クロームは口数が少ないため、あまり人との交流もない。  
そう簡単に話題など思い付かなかった。

（あ…でも）

1つ。1つだけ、あるじゃないか。

“あの…さっき犬が言ってました…。何で…骸様はイタリアへ行くのかって…”

クフフ…いきなり難しい質問ですね。

“……。”

あなたは、…分かっているんでしょうね。

“…はい。”

僕も、おかしくなったものです。

…しかし、あなたも。…僕と同じ気持ちなんでしょう？

“はい。”

クロームは、いつもは到底見せないような笑顔で笑った。

また、会いましょう。クローム。

“はい…。”

今度はこんな異世界じゃない。

どうか、現実の世界で。

神様になんて願わない。

だから、自分達の力でこの人と再会しようと心に決めた。

ボスと共にマフィアを守っていこうという奇跡的な決意をしている  
であろうこの人を、絶対に救い出さなければならない。

（待ってて下さい…骸様…）

異世界はどんどん薄れ、やがて意識は途切れていった。

\*\*\*

「……。」

ハルはエコバックを肩に掛け、ジャージ姿でコンビニにいた。

（牛乳と食パンと…後は…）

「…はあ…」

（明日…でしたっけ）

<ドン！>

「はひっ！」

いきなり後ろから衝撃がした。

どうやらボーッと突っ立っていたため、人にぶつかられてしまったらしい。

「あつすつすみません！！」

「ああ…悪い……………い！？」

「え……！」

ハルはとっさに振り返った。

「ハル……」

「獄寺さん！」

\*\*\*

「何で獄寺さんこんな時間に出歩いてるんですか！もう夜中なのに！」

「はあ！？それはこっちの台詞だバカ！女が1人でこんな時間に出歩いてんじゃねー。っつか俺いくつだよ！19歳の男がこんな時間に出歩いて悪いかボケ。」

2人はコンビニの前のベンチでジュースを飲みながら、いつものようにワーワー騒いでいた。

「バカでもボケでもありません！違いますよ、私が言ってるのは明日イタリアなのに寝ないでいいのかって事ですっ。」

「んなの飛行機の中で寝るから大丈夫だ」  
獄寺はフンツと鼻をならす。

「何なんですかその態度は…。ホント昔っから変わりませんよね、獄寺さんは。」

ハルはハア、とため息を吐いた。

「それはお前だろうが」

出会ってもう6年以上が経つが、2人一緒にいれば、もう喧嘩三昧である。

流石に年が経つに連れて喧嘩の仕方は落ち着いてきたものの、それでも2人の喧嘩は今でも絶えない。

「……これでも…心配してるんですからね」

「！」

いきなり暗い声を出したハルに、少しギョツとする。

「…私ボンゴレの守護者になるために皆さんがイタリアに行くってことちゃんと知ってるんですからね！」

ハルは獄寺と目も合わせずに強い口調で言った。

「…だ…誰から聞いた…」

「京子ちゃんです」

「……………」

これだけ獄寺が一方的に言われるのは珍しい。

「わ…悪かった、言わなくて」

「…いいですよ別に…。ハルを心配させたくなかったんでしょ？  
…でも今更驚きません。…マフィアの事初めて知った時に十分過ぎるくらい驚きましたから。」

ハルや京子が初めてボンゴレやマフィアの事を知ったのは、高校生になった頃だったか。

「…そう心配するんじゃない。十代目がいる限り、心配なんて必要ねえよ。…つか俺がいる限り十代目は大丈夫だ。」  
獄寺は少し笑ってジュースを飲み干した。

「はい…。」

ハルもまたジュースを飲み干す。

「それと…」

「ん？」

「あ、やっぱりいいです！…さあもう帰りましょう。ハル、お母さんとお父さんに怒られちゃいます。」

「…？…ああ…。」

そして2人は帰路についた。

「送ってやるよ」

「お、珍しく獄寺さんじえんとるめんですね」

「うつせーな、置いてくぞー！」

「はい」

（そんなこと…やっぱり聞けません）



彼らがいつか守護者となり、イタリアへ行つて…またこの並盛に帰つて来れるのだろうか。

もう…二度と会えなくなってしまうのではないんだろうか。

でも、

そんなことを聞くのは怖すぎた。

（だって獄寺さん…聞いたら本当のことサラッと言っちゃいそうな  
んですもん）

「また明日！皆さんを見送りに行きますね！」

「来なくていいぞアホ女」

「アホじゃないです！何が何でも行きますからね！おやすみなさい」

明日は晴れるといい。

そして、京子やビアンキやイーピンと一緒にとびつきり笑顔で送ってやるんだ。

…そう決めて、家に入った。

t o b e c o n t i n u e . . .

## 標的5「それぞれの想い(下)」(後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございました！  
これで「それぞれの想い」は終了です。

そして前回に引き続きアンケートを行いたいと思います！

これからツナ達はイタリアへ発ち、ボンゴレの本部へ入ります。  
そこで登場させてほしいキャラを募集するので、是非リクエストしてやって下さい

心よりお待ちしております\*+

では改めて、ありがとうございました！

## 標的6「出発」(前書き)

前回はたくさんのリクエストありがとうございました。

早速リクエストしてくださった「ビアンキ」登場します！

というかこの回殆ど獄寺とビアンキが持っていていっちゃった感じですよ  
(笑)

でもやっぱり最後の最後に持ってたのはみんなのママン、奈々さんですね(＾m＾)

## 標的6「出発」

シリ…

シリシリシリリン！

シリシリシリシリリン！！

シリシリシリシリシリリン！！！！

「…う………」

騒がしい目覚まし時計の音に叩き起こされたツナは、少々機嫌が悪かった。

（朝か…）

いつもなら二度寝してリボーンに飛び蹴りを喰らうところだが、今日に限って絶対に二度寝なんてできない。

「…あ、おはようリボーン。」

机の上には、自らの荷物の確認をしているらしいリボンがいた。リボンもまだパジャマ姿である。

「早く起きてお前も確認しやがれ。そしたらさっさと朝食にするぞ。」

「うん。」

ツナは眠たい目を擦り、ゆっくりとベッドから下りた。

\*  
\*  
\*

...ントントント

台所から聞こえるリズムカルな音。

「…母さん…おはよう」

「あら！今日はさすがにちゃんと起きてきたのねツつくん。」  
ツナの母親、奈々がいつもの優しい笑みを浮かべる。

「もうその呼び方止めてくれって言っただろ…。もう俺19なんだから」

「はいはい、悪かったわね。ツナ。」

5年経って、自分の息子は夫にどんどん似てきていた。  
…というか、奈々はそう感じていた。

「朝ご飯できてるわよ。早く食べなさい。  
ランボ君はまだ眠ってるから、空港へ向かう車の中でおにぎり食べ  
させてあげましょう。」

あ！イーピンちゃんもお見送りたいだろうから、イーピンちゃん  
にもおにぎり作らなくちゃだめね。」

「うん。…ありがとう母さん。」

本当にいつまで経っても自分の母親は変わらないんだろうとツナは  
思った。

（俺がイタリアに行っても、もし何かの間違いでマフィアになっち

やったとしても)

「あ、それとビアンキちゃんは昨日の夜獄寺君の家に行ったわよ。今日は出発の日だし、姉弟水入らずで過ごしたいのかしらねえ。」

「えゝ！」

そ、その時ビアンキ جوجلかけてた!？」

出発の日に獄寺に体調不良を起こされたりしたら最悪だ。

「え?…うーん…多分かけてたと思うけど。」

「ホントに!?!…良かったあ…」

ツナはホツと胸をなで下ろす。

「おいツナ、早くママンの朝飯を食え。」

後ろから、椅子の上にちょこんと座ったりボーンが、ツナに声をかけた。

「…あ、うん。」

(来ちゃったんだな…ついにこの日が…)

複雑な気持ちのまま、ツナは朝食にありついた。



\*\*\*

「さあ…もつそろそろ行くわよ隼人。」

「チツ…うつせえんだよ姉貴…。」

ビアンキと獄寺は、丁度家を出る所だった。

「忘れ物はない？」

「無い！…たぐいくつだと思ってんだどいつもこいつも…」

「全く…いつまで経ってもしょうがない子ね…。」  
ビアンキはあ、と小さくため息を吐いた。

「ってか何で俺の家に来るんだ！お前がいると息苦しいんだよ！」

「本当に素直じゃないんだから隼人ったら…。嬉しいならそう言い

なさい！」

「どうやったらそんな幸せな思考になれるんだ!!?」

(うるせえ…)

いつもとは違う、騒がしい朝。

\*\*\*

「じゃあ、行ってくる」

「……」

「うん。気を付けて」

少し重い空気。そして変な静けさ。

…それはいつも余り喋らない千種とクロームのせいではなく、いつもはうるさい犬のせいだ。

「お前…帰ってくるんだろーな」

「え」

「また帰ってくんのかって聞いてんらー!」

「……」

クロームは少しキョトンとして、

「…帰ってくる」  
少し笑った。

「…フン、ならさっさと行ってこい！」

「うん、行ってきます」

「「…うんうんうん」」

\*\*\*

ガタンゴトン…ガタンゴトン…

「……………」

2人は電車に揺られ、外を眺めていた。  
生憎座席は満員で、座ることができなかったのだ。  
獄寺の足元には大きなスニーカーが置いてある。

「ねえ、隼人。」不意に、ピアンキがボソツと呟くように話しかけた。

「…あ？」

やはり獄寺は不機嫌そうに返事をする。

「…あなた達、ハルや京子達にちゃんとイタリア行きの事言ったの？」

ビアンキは、守護者達が京子やハルにマフィアの事を話すのを嫌がっていたため、この事も詳しくは話していないのではないかと思っ  
たらしい。

「……ああ。笹川が芝生頭から聞いたらしい。それを笹川がハルに  
伝えたんだとよ。」

獄寺自身、昨日の晩にハルに告げられ驚いていた訳なのだが。

「…そうなの。」

「…それが、どうかしたのかよ。」

「……あの子達、すごく不安なんじゃないかと思うの。」

「……………」

それは獄寺も、何となく感じとっていた。

「きっと、近い将来…あなた達と離れ離れにならなければいけない  
日が来るのを恐れているのよ。」

…そしてそれが正式なマフィアになるからだって事もあの子達は分

かってる。」

「ああ…そうだな。」

その言葉の意味が、獄寺にはよくわかった。

「それに…ツナ達も迷っているわ。」

「!?!?!?!?!十代目が…?」

ツナが迷っている。

…これは獄寺にとって結構な衝撃だった。

「そりゃ…ね。」

…だってツナは…日本にママンや京子やハルを置いて行かなければいけないのよ?」

「……………」

そんなこと、正直言って考えたこともなかった。

「いいえ、ツナだけじゃないわ。山本武だってたった1人の父親が

日本にいる。

それにあの子には野球もあるんでしょ？

…笹川了平だって京子の事が心配でしょうし、クロームにも仲間の事があるわ。

ランボもあの年よ、イーピンの事もあるし…不安でしょうね。

あの雲雀恭弥でさえ、並盛を離れるのに少なからずためらいはあるはずよ。」

「……っ……」

反論しようとするが、何も言葉は浮かんでこない。

（俺は…当たり前だに思ってたのかもしれない）

ツナがボスになり、自分達はそれを支えていく。

ボンゴレ十代目守護者として、ボンゴレという組織を守っていく。

…そう、当たり前前に夢見ていたのだ。

「確かに、」

「…？」

「確かに、運命には逆らえない。…だからあなた達は絶対にマフィアになるわ。」

…でも。…そんな迷いがある状態でマフィアになる事は、…死を選ぶのと同じ事よ。」



「…あ…ああ。」

獄寺はこの姉を恐ろしく感じた。  
しかしいつもの恐ろしさではない。

（俺には見えなさ過ぎてた…。姉貴には…ちゃんと見えてた…。）

「あなたは近くに居すぎたのよ。」

「！」

やはり、怖いと思った。

「…俺は…十代目やアイツ等と違ってイタリアに行こうが失うものなんてねえんだ。…だから…」

「…そう。」

それだけ言って、また窓の外を眺め始める。

「……！……おい着いたぞ。」

「ああ……行きましょう。」

2人は足早に電車を出る。

「隼人、」

「？」

「私はあなたが達がマフィアになっても、一緒にイタリアに行くつもりはないわ。」

「……！？」

「私は殺し屋だけど、京子やハルやママンやイーピン達を守らなければいけないもの。」

「そう、か。」

何故かゾクツとして、

ああ、さっきのとはまた違う、本当の恐ろしさなのだなと思った。

（隼人…あなたは間違ってるわ。…あなたにもたくさん、失うものはあるじゃない。）

2人はただ、無言で歩いていた。

\*  
\*  
\*

この空港独特の感じ。  
ツナは嫌いじゃなかった。

（ついに出発…か）

「みんな…揃ったね。」

守護者が全員、入口前に集合した。

ただクロームと雲雀だけは少し離れた場所にいたが。

「じゃあ、行ってくるよ。」

ツナは奈々や京子、ハル、ビアンキ、イーピンに向かって、優しく微笑んだ。

「ツナ君、お兄ちゃん、みんな…。無茶しちゃ駄目だからね。」

「おう、心配はいらん。」

「うん、ありがとう京子ちゃん。」

「私達、皆さんが帰って来るの待ってますから。」

「……健闘を祈ってるわ」

「ランボ！みんなに迷惑かける駄目よ！……皆さん、気を付けて。」

「……ツナ。」

「……必ず、必ず帰って来るのよ。」

「……！……うん。みんな、ありがとう。」

送ってくれたみんながくれたのは、期待なんかじゃない。

ただ、無事に帰って来て欲しい。  
その思いだけだった。

「じゃあ、行ってきます!」

「行ってらっしゃい！」

彼女達の笑顔を見ると、やっぱり安心した。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.



## 標的6「出発」(後書き)

最後までお読み下さりありがとうございました！

さて、前回に引き続きアンケートを行いたいと思います。

ツナ達がボンゴレのイタリア本部に行くにあたって、登場させて欲しいキャラを募集中です。

皆様のご参加を心よりお待ちしております\*+

では改めまして、ありがとうございましたm( )m

## 標的7「到着」（前書き）

本当におひさしぶりです。

何ヶ月もほったらかしにして申し訳ありませんでした…；；

中々物語が整理できなくて…><

不定期更新には変わりありませんが、やっと復活しました！

この小説を楽しみにしていただいていた方に、心よりお詫び申し上げます。

これからこの小説を宜しくお願い致します。

今回余り物語に変動はありませんが、かなり重要かつ、アンケートで多数リクエストを戴いたあの人が登場です！

## 標的7「到着」

（遂に、来たんだ）

ツナ達守護者は、飛行機から丁度降りたところだった。

「全員降りたな。」

リボーンが数を確認する。

「イタリアの…空気…」

獄寺にとって懐かしい、この乾いた空気。

「イタリア…久しぶりですね…。」

この地は大嫌いですが…」

いつの間にかクロームから骸に変わっている。

「何かワクワクしてきたな！」

「馬鹿かお前は！遊びにきたんじゃないぞ！」

「極限外国だー！！」

「そのまんまですね」

「懐かしい空気…ボヴィーノを思い出します。イタリアはやっぱり良いです。」

「……………」

「あつ！雲雀さん先に行かないでください！！」

「あのボンゴレ無視しないで…」

「待ちやがれ雲雀！十代目に迷惑おかけすんじゃないやねえ！！」

「ははっ！雲雀本部の場所知ってんの？」

「極限俺も行く！」

「雲雀恭弥と同じ所になんて泊まりたくないですね」

「咬み殺す」

「骸お！！雲雀さん！！」

「ガ・マ・ン……………うわああああん！！」

「まったく…なんの成長もねえ奴らだな。」

もう収集が全くつかないながらも、一行は何とか全員で空港を出た。

「…なありボーン、こっからどうすんの？」

ツナ達はもちろんだう行けば良いのかわからない。

「まあ待つてろ。…すぐに奴がくる。」

リボーンはそういうとニヤリと笑った。

「奴？」

「ねえ…早く僕はボンゴレの本部に行きたいんだけど…。  
待つのは嫌いなんだよね。」

雲雀がイラついてきたらしい。  
今にもトンファーを出しそうな勢いだ。

「いつ…！雲雀さんちよつと待つて！もうすぐ誰か来るみたいです

し……」

「……。」

（あああ……もう誰か知らないけど早く来てよー！！）

「あ……。」

おいツナ……あれ……。」

突然、山本が声を上げた。

「え？」

山本が指をさしている方向を見ると、そこには黒いリムジン。

（リ……リムジン……）

初めて見る高級車に、少し圧倒されてしまう。

「……あ！あれは……」

守護者全員が顔を向ける。

「よう、弟弟子。

大勢でのお出迎え感謝する。

…俺の元家庭教師と生徒までな。」

「…ディーノさん！」

「やっと来やがったか…」

「跳ね馬…」

「キャツバローネ、ですか」

「極限に誰だ！」

「ボンゴレの兄弟子の方ですね。」

「お前の記憶力どうなってんだ芝生」

「まあ髪型変わってるししゃーねーって。」

颯爽とリムジンから出てきたのは、キャッバローネのボス、ディーノだった。

「ディーノさん、どうしてここに…?」

「そりゃあ可愛い弟弟子たちが来るんだからな。俺が9代目に申し出たんだ。」

俺が案内したいってな。」

ディーノは爽やかに笑う。

「はあ…。」

「ま、立ち話もなんだし、早く乗ろうぜ。」

ディーノは親指を立て、後方のリムジンを指差した。



「あ、はい！」

守護者たちはそろそろとリムジンに乗り込んだ。

「おいデイナー。」

「ん、なんだリボーン？」

「お前、弟弟子に嘘ついてんじゃねーぞ。」

「ついてねえよ。9代目に申し出たのは本当だしな。  
…ただ、話してねえ事があるだけで。」

「フン、生意気言っんじゃねえ。へなちょこ。」

「ははは…ひつでえ」

そして全員が車に乗り込んだ。

「ロマーリオ、出発してくれ。」

「了解、ボス。」

（なんかすごい光景…）

ゆっくり周りを見渡して、かつてないこの異様な光景に、ツナはそわそわしていた。

運転はロマーリオ、助手席にディーノとリボーン。

そして喧嘩を防ぐ為に自分の両隣に雲雀と骸。

思えば、今まで守護者全員が集まったことなどほとんどなかった。格段全員が仲が良い訳ではないし、本当に仲間だと思っているのかよく分からない者だっている。

（どうなるのかな…これから。）

この時の彼らがこれから自分達に課せられる試練を知るはずもない。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

## 標的7「到着」（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました！

尚、いままで取らせて頂いていた出して欲しいキャラのアンケートですが、今回をもって終了させて頂いていただきます。

なので、次の投稿でアンケートを締め切りいたします。ご了承ください。

締め切りまじかです！どしどしリクエストお待ちしています\*+

極力リクエストにお答えできるように努力はいたしますが、場合によってはお答えできない場合もあります。

## 標的8「本部へ」（前書き）

今回はディーノさんの他にアンケートで多数リクエストいただいた  
あの人の影がちらほらと…（＾m＾）

## 標的8「本部へ」

「ここでいいか？、ボス」

「ああ。」

どうやら本部の近くに着いたらしい。

ディーノがそういうとロマーリオは車から降り、ドアを開けた。

「あ、ありがとうございます、ロマーリオさん。」

「ははっ！ 氣イなんか遣わなくて良いんだぜ。」

ほとんど全員がお礼を言いながら車から降りる。

「さ、俺達はキャッバローネに戻るか。」  
「おう。」

「え…ディーノさん達は本部に入らないんですか？」

「ああ。」

入口まで行ったら案内役がいるはずだ。  
俺達は色々立て込んでてな。」

「…？そうなんですか。」

…それじゃあ自分達で行きますね。」

もちろんツナは元からリボーンに連れて行ってもらうつもりだろう。

（なんか忙しないな…）

「じゃあな、また会おうぜ。」

「はい、ありがとうございました。」

「ありがとうございます！ディーノさん！」

「ありがとうございました。」

「極限に礼を言っぞ！」

皆口々に礼を言い、ディーノとロマーリオは去って行った。

「ツナ、どうせ迷うなら俺が案内する。」

リボーンは早速スタスタと歩いて行く。

「ちょ、リボーン！迷うの前提かよ！」

そうは言いながらも、どうせ最初から案内してもらおうと思っていたので、ツナは素直にリボーンに付いて行った。

他の守護者もツナに続く。

しかし雲雀はいつもに増して機嫌が悪そうだ。

「まだ着かないの」

「まだだな」

「ふうん」

雲雀とリボーンの素っ気ない会話が突拍子も無く始まり、終わる。

「…ていうか…ここどこなの？」

木が結構生い茂ってるし、人通りも民家とかも全く無いし…」

ツナが恐る恐るリボーンに尋ねた。

「何言ってるんだ、もうここはボンゴレの敷地だぞ。」



「『『え』』」

サラッとすごい事をいうリボーンに、一同は目を見開いた。

「マフィアの敷地、ですか…」

骸がポツリと呟くように言った。

「…それにしてもボンゴレって一体…」。

だからディーノさんはあそこで俺たちを降ろしたんだ…」。

そう、自分たちが降ろされたのは、ボンゴレの本部に入る門の前だったのだ。

「やっぱボンゴレってすげーのな！  
なんかワクワクするぜ！」

「ちなみにボンゴレの本部の隣にはヴァリアー基地の本部もあるかな。」

「ええっ！」

またも一同はリボーンに驚かされる。

同時に何人かの守護者達の目が光ったように見えたのは、気のせいではない。

「じゃあスクアーロにも会えるかもしれねえな！」

しかし、この事実喜んでるのはやはりこの男だけだろう。

「会いたくねえよバカ！」

（俺もできたら会いたくないよ…）

ツナだって獄寺だって、あのヴァリアーとの戦いが忘れられるはずがない。

「スクアードにメールしとかなきゃだな！」

「「「「「………。」」」」」

…一同、沈黙。

「スクアードとよくメールとかするんだよね」

山本は携帯を取り出してカコカコとメールを打ち出す。

（山本、スクアードとメル友…！？）

山本の社交性に勝てる者など絶対に他にはいないだろう。

「ま、後3分もすりゃ着くからな。」

「3分も…か」

『Subject: no title

Message:

久しぶりだなスクアーロ！

お前知ってるかもしれないけど、ボンゴレ10代目の守護者がボンゴレのイタリア本部に召集されてさ。

もうすぐ本部に着くから、会えたら会おうぜ

じゃあな〜(＾O＾)／『

『Subject: Re:

M e s s a g e :

それぐらい知ってる  
会っぜ、必ずな  
『

T o b e c o n t i n u e d . . .

## 標的8「本部へ」（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました！

次回、遂にボンゴレイタリア本部に到着です\*+

## 標的9「ボンゴレイタリア本部（上）」（前書き）

ボンゴレイタリア本部に到着したツナ達の、予想外な案内役の登場です！

物語の進度が遅くてすみません……

本当にちまちま進んですm（――）m

## 標的9「ボンゴレイタリア本部（上）」

聳<sup>そび</sup>えるものは、まるで城壁。  
その後ろには、もちろん城。

…建物にここまで威圧感がだせるものなのだろうか、とさえ感じて  
しまう。

（…俺がこれの次期10代目？  
………もう笑いしかでてこない）

「おいツナ、何にやにやしてやがる」

「別に、将来の進路に真剣に悩んでただけ」

「そうか、10代目になる気になったんだな。」

「違うよ！逆に決まってるんだろ！  
決意を一層強くしたんだもちろん」

「ここまで来といて何言つてやがる、やっぱりお前は頭カラだな」

「なっ…」

ここまでリボーンに刃向かう事が出来るようになった自分は、やはり怖いもの、まあ要するにマフィアに耐性が付いてしまったのかとツナは思ってしまう。

更にはちよつと前まで獄寺を怖がっていたのが、雲雀や骸にまでなんの恐れも無く口出し出来るようになってしまったのも事実。

…そんな自分が最近嫌で堪らない。

「はああ…」

「何ため息吐いてやがる。…入るぞ。」

「うん。…行こう。」

一行は馬鹿デカい茶色い金属扉の前に立った。

「……。」



「……………」。

「……………」。

「あ……あの……リボーン……」

「なんだ」

「これ……どうやったら開くの？」  
ツナはその大きな扉を指差した。

「Xバーナーでも2、3発ぶっ放せ。開くぞ。」

Xバーナー2、3発で開く。

……そのリボーンの言葉は、その扉にかなりの強度があることを示している。

「開くじゃないよ！壊れるの間違いだろ！！」

「冗談だ。このまま立ってろ、時期に開く。」

「からかうなよっ！」

そして、一同が扉の前に立ってから20秒ほどが経過した。

「まだなの？」

雲雀が苛立ち始めてきた。

「極限遅いぞー」

せつかちな了平も我慢が切れてきたらしい。

「も…もうちょっと待って下さい…」。

きつと開きますから。」

と言った後、ツナはしゃがんでこそこそと耳打ちし始めた。

「リボーン！まだ開かないの？」

っていうか何でこんなに待たされてるんだよ俺たち…」

「もうじき開く。」

この時間は俺たちを霧の幻覚でないことをチェックする為の時間だ。カメラがどこかに内蔵してある。

…恐らくもうじき最終チェックも終わるな。」

「…ホントに？」

ツナは疑わしげに声を上げる。

ガチャン！

「………！」

突然、扉から大きな金属音がした。

ギイイイ…

「扉が…」

扉がゆっくりと開く。

「…自動で開くのかよ…」

見た目とは裏腹に、なかなか高性能である。

扉が徐々に関けられ、視界が広くなっていく。

「…！…あそこに誰がいる…」

目の良い獄寺が人影を発見した。

「え…あれって…」

山本が驚くように声を上げる。

扉の向こうには、長身で黒い服を着た男。

…いや、最も注目すべきはそこではないだろう。

……銀色の、美しい長髪。

彼は仁王立ちしてツナ達ボンゴレ十代目一行を待ち構えていた。

「……スクアーロ……！」

「……いささか豪華すぎるな……」

「え……何？リボン……」

「………………。」

ボンゴレ最強の暗殺部隊、ヴァリアー。

そのNo.2である彼の登場は、一体何を意味するのだろうか。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

## 標的9「ボンゴレイタリア本部（上）」（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます\*+

感想や評価などをいただけると本当に嬉しいです！><

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5709h/>

---

We are X !

2010年10月8日22時22分発行